

ワイヤレスブロードバンド実現のための周波数確保等に関する意見 提出

| | |
|-------|-------------|
| 意見提出元 | 関西テレビ放送株式会社 |
|-------|-------------|

| 項目 | |
|--|---|
| (1) ワイヤレスブロードバンドの今後の展望(2015年ごろや2020年ごろのワイヤレスブロードバンドのサービスイメージ、システムイメージなど) | <p>・2015年までにすべての世帯にブロードバンドサービスを実現する「光りの道」構想を実現するためには有線のみでは困難でありワイヤレスによるブロードバンドアクセスサービスは必須である。その具体策として現在、100Mbps以上のアクセスを可能にするため携帯電話の高度化、第4世代移動通信 IMT-Advanced を WRC-07(世界無線会議)で周波数が特定された3.4-3.6GHzで導入することが予定されている。また、3.4GHz-4.2GHz、4.4GHz-4.9GHzも今後第4世代用周波数として検討されている。また2GHzに加え第3.9世代用として2009年に1.5GHz、1.7GHzが割り当てられており、LTE通信技術を導入しデータトラフィックの増大の吸収をはかろうとされており、グローバル的にも移動通信における将来の主力周波数帯域となると考えられる。</p> <p>・一方、放送分野ではデジタル放送は国民にとって重要なブロードバンドワイヤレスサービスの一つとして認識している。2011年デジタル化移行ですべてが終わる訳ではなく、2020年以降ではスーパーハイビジョンによる衛星21GHz帯で試験放送が検討されており、圧縮技術、伝送技術の高度化の応用により地上波においてもスーパーハイビジョンによる放送が将来実現する可能性がある。また番組制作過程における素材伝送においても高画質、大容量化は必然でありこれらを踏まえた将来設計を検討する必要があると考える。</p> |
| (2) ワイヤレスブロードバンドを実現するための課題(周波数の確保、国際標準化・研究開発の推進、利用環境の整備) | <p>・将来の移動通信における大容量、高速通信技術規格は国際標準的にもLTE、LTE-Advancedと考えるられ、第3.9世代、第4世代の1.5GHz帯、3.4GHz帯で導入されようとしている。また、第3世代2.0GHz帯でもLTEオーバレイが検討されており、将来すべてLTE技術に置き換わろうとしている。700-900MHz帯における移動通信においては800MHz帯の携帯用周波数再編により空く915-950MHz、地上デジタル放送完全移行により空く730-770MHz帯を利</p> |

| | |
|--|---|
| | <p>用した <u>700/900MHz</u> ペアによる使用が LTE 化の早期実現のためのベストプランと考える。当然ながら利用に当たっては隣接周波数で使用している 800MHz 帯 FPU、地上デジタル放送等他のシステムに影響を及ぼさないよう十分な検討が必要と考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・放送分野においては、ワイヤレスブロードバンドにおける将来の放送システムとして地上波においても次世代放送システムであるスーパーハイビジョンを実現するための圧縮、大容量伝送技術の開発を推進すべきであり、2020年以降になるとは思われるが将来実現するための周波数確保も必要になるのではないか。 |
| <p>(3) 関連する国内外の動向と課題</p> | <p>700MHz/900MHz への携帯電話導入に向けての検討において隣接する 800MHz 帯放送用 FPU について申し述べておくが、地上波放送事業者は国民の安全に寄与するため緊急災害放送が義務づけられており、国民にその情報、映像、音声をお届けの必要がある。この 800MHz 帯 FPU は波長の長さにより見通し外の伝送もでき得る特性を有しており災害時の映像中継には大変重要なシステムである。またこの特性を活かし、マラソン等ロードレース中継に大きく貢献しており放送局にとっては不可欠なものである。頻度が少ない等の理由でホワイトスペースの利用で十分であるという議論はまったく成り立たない。</p> <p>近年、高度化のための研究開発により 800MHz 帯 FPU において同一の帯域幅でほぼ 2 倍の伝送容量を持つ高画質システムが実現されている。このことにより 800MHz 帯 FPU を利用したテレビ番組放送の高画質化がさらに進められることが期待できる。早期の制度化が望まれる。</p> |
| <p>(4) その他、将来のワイヤレスブロードバンドによるサービスやシステムに関する事項</p> | <p>今後、情報通信の大容量化、高速化をにらんで未開拓の領域であるテラヘルツ帯（100GHz～500GHz）の研究開発の取組及び実用化を産学官でさらに促進していくべきと考える。</p> |